



隣の芝生



川崎ゆきお

「たまには何も無いのもいいですなあ」

「熊本さんはいつもお忙しいですから」

「いやそうでもないよ」

「朝早くからいろいろされているでしょ」

「日課だからね。しかし、今日は全部休みだ。たまには何もしない日があってもいい」

「私なんて、毎日やることがないので、暇を持て余していますよ。しかし、意外と忙しい」

「ほう、やることがないのに」

「じっとしていても間が持たないので、テレビを見たり、掃除をしたり、買い物に出たり、食べるものを作ったりと、これはこれで無限の領域があるんですよ」

「ほう、無限ですか」

「まあ、家事のようなものですがね。道にはみ出した庭木も切らないといけませんし、生け垣もきれいに散髪して、整えないといけませんからねえ」

「それもまた有為なことですよ」

「しかし、仕事で忙しいとは訳が違いますよ。実際は忙しいんですがね」

「家のことは家内に任せてあるから、僕にはそんな用事は滅多にないねえ。生け垣もあるけど、植木屋にやってもらってるしね」

「熊本さんはお仕事で忙しいので、そちらに時間を割いて当然ですよ。私が忙しいのは私用ですし、内向きのことですから。熊本さんは外に出てお仕事をされている」

「何か、嫌味かね」

「いえいえ、まだまだ現役で活躍されているので、羨ましく思っていますよ」

「そうなんだが、私の仕事も実はやらなくてもいいんだなあ。やらないと食っていけないから仕方なくやっているだけだよ。あなたは働かなくても、食っていけるんですよ」

「はあ何とか」

「そちらの方が羨ましいよ」

「いえいえ」

「必要のない……」

「はあ？」

「必要のないサービスを作り、売りつける」

「えっ」

「僕の仕事だよ。世間が必要としているんじゃない。僕が食うために必要としている商品なんだ。サービスだがね」

「はい」

「決してサービスじゃないよ」

「はあ」

「昔、田舎の喫茶店で、ゆで卵一つサービスしますって貼り紙があった」

「サービスですか」

「朝なのでモーニングサービスがあって、ゆで卵とトーストが付いてくる。コーヒーの値段でそ

れが付いてくるんだから、サービスだな。だから、モーニング サービスなんだ。さらにその上、ゆで卵をもう一つもらえるらしいんだ。言えばね。二つになる。まあ、朝から卵二つはしんどいけど、これこそがサービスだ」

「はい」

「しかし、私のやっているサービス業のサービスはそれじゃない。必要かどうか、また効果があるのかが曖昧なサービスだよ。何かがあっての上でのサービス、つまりおまけだね。それじゃない」

「ちょっと、そういう経済の話は苦手です」

「サービスを売っているようで、客からサービスを受けているようなものなんだ。サービスしてくれているのは客なんだ。最近それが苦痛でねえ」

「いえいえ、それは正当な商行為でしょ」

「そうなんだが、このサービスがなくなると、一番ダメージを受けるのは客ではなく、私なんだ。食えなくなるからね。植木屋に払う金もなくなる」

「忙しく、やっておられるのでしょ。蓄えはないのですか。あ、失礼」

「自転車操業だし、借金もある」

「はあ」

「だから、あなたの方が羨ましいと言ったでしょ」

「それで、今日、お休みになっているのは」

「ああ、一日休むとほっとするねえ。客をだますまねは、今日はしなくてもいい」

「それは考えすぎですよ、熊本さん」

「そうかね。でも、一儲けしたところで、早く引きたいよ」

「頑張って大儲けしてください。私なんて、そんな目的がないので、羨ましいですよ」

「芝生は青く見えるか」

「はい、隣の庭の」

「うむ」

了